



## 昭和時代の「キオク」

皆さんにとって歴史上の「むかし」はいつからでしょうか。縄文時代？江戸時代？それとも、もっと新しい時代ですか。昭和時代が幕を下ろし、平成時代に入って早、15年目。すでに、昭和は歴史上の立派な「むかし」となっているのです。自分の「キオク」にある歴史は懐かしいものです。

さて、ここに二つの「キオク」を用意しました。

まず一つは筆箱です。この筆箱はアルマイト製で、昭和30年頃のもので、アルマイト製は当時の最新の素材です。メタリックな質感、そしてこの観音開きのデザインも斬新で、当時の少年・少女の羨望の的だったに違いありません。



■アルマイト製の筆箱

せん。

その後筆箱は、プラスチック製のものに受け継がれます。「象が踏んでも壊れない」筆箱が流行し、小学生たちが憧れたのも昭和40年代。文房具にまで夢を抱くことのできた幸せな時代だったのかもしれませんが。現在では様々な素材、形の筆入れがあります。「買えるか、買えないか」から、「どれを選ぶか」の時代になってしまいました。

勉強嫌いの方にとっては、勉強するためではなく、落書きやいたずらに使った筆記用具を入れるための箱だったかもしれません。筆箱から当時の先生、友人、学校で起こった様々な出来事をはじめ、社会情勢などの「キオク」がよみがえります。

次の「キオク」は何の変哲もない陶磁器製のカップと皿ですが、皿にはなにやら人の顔が焼き付けてられています。そう、これは昭和50年頃、一世を風靡したイギリスのロックグループ『ベイ・シティ・ローラーズ』のキャタクターグッズです。当時は第二のビートルズとも呼ばれ、どこもかしこもこのグループ一色の時代でした。特に女の子は、それぞれ好みのメンバーの派に分かれ、真剣に応援したものです。アイドルを取り巻くこの雰囲気は今とまったく変わりありません。

「キオク」という言葉にあえてカタカナを



■一世を風靡した『ベイ・シティ・ローラーズ』のカップと皿

使ったのは、そこにそれぞれの人の喜怒哀楽に満ちた、懐かしい歴史が閉じ込められているからです。そして、その「キオク」はこれらの「モノ」によって開かれるのです。

皆さんも、すでに「むかし」となった昭和時代の「キオク」を身近な「モノ」から開いてみませんか。(増山)

※今回紹介した資料は、町民の方々からいただきました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

▼田原町博物館 ☎22局 1720